

(2000年冬号) 二〇〇〇年と電気

この雑誌(カーピア・セロム)の本号は二〇〇〇年一月十日の発売。だが、原稿は一九九九年十二月の暮も押し迫った時期に書いている。ミレニアム・アクシデント(?)が本当に大晦日の深夜に起きるのかどうか、原稿を書いている今現在、全くわかっていない。

総理大臣が「大丈夫 心配ない」とテレビで云っているのだから、たぶんそうなんでしょうと、十二月の初め頃は、家内ものん気だったのだが、月半ばに矢庭にポータブルの石油ストーブを買ってきた。乾電池二個で着火する芯上下式のやつだ。

「スーパーへ行ってたまたま暖房器具売場の前を通りかかったら、男の人が“やっとここで見つけた”と言いながらストーブを買っていたの。四個残っていたけれど、別の売場をひと回りして、もう一度戻ったら、今度は一個しかない。あわてて最後の一個を買ってきた」

翌日の新聞では「市内のどの店もポータブルストーブは品切れ」とあった。今、このストーブは、一度だけ着火テストを済ませ、私の書斎の隣室にポツンと置いたままになっている。

生来、のん気な夫婦でもいつも「まあ何とかなさ」と何事もタカをくくって暮らしているのだが、ストーブを買ったついでに念のため最小限の準備をと家内が考えて用意したのがあと二つ。ひとつは、以前どこからかもらったラジオ付きの懐中電灯が使えるかどうか確かめること。これは神戸の大地震の後に一度点灯するのを確認したあと、放っておいたものだ。結果は電池切れがわかった取り替えた。

もう一つは、飲料水を入れるポリタンク一個を購入したこと。大晦日の夜に汲み入れれば良い。

これで、火とあかりと水の三つが揃った。人間これだけあれば、数日クライナラ何とか生き延びられるだろう。後は、おせち料理を少々用意し、インスタント食品でも貯め込んでおけば良い。

もう一つ、銀行のコンピューターが誤作動して、預金残高が狂う恐れがあるから、年末に通帳の残高記載をしっかりとしておくべきだという忠告が、テレビか何かで知らされたがこっちのほうは、大した額を預けているわけじゃなし、万一誤作動でマル画一つ増えでもしてくれたら、しめしめ、だ。

ということで我が家の二〇〇〇年対策は終了し、ささやかな準備が除夜の鐘と一緒に役立つのかどうか、楽しみ半分、おそれ半分といったところだ。

二〇〇〇年対策のおかげで、家庭の生活用具を一度確かめてみる機会に恵まれた。それで気付いたのは当り前の事ながら、ここ五十年ほどの間に電気の占める位置があきれるほど大きくなったことだった。

買い置きをしたポータブルストーブの例をみるように、普段使っているストーブの燃料はもちろん灯油だが、電気を切られてしまうと作動しない。洗濯機の主役は水だけれど、電気がなければ動かない。自動炊飯器で米もたけない。温水も出ない。風呂にも入れない。トイレでお尻の洗滌もできない。テレビもだめ。電話やファックスも通じない。電話なら今はやりのケータイがあるじゃないかと考えたが、ケータイの充電には電気が要る。我が家の屋根の雪は電気で融かしているのだが、これが停ったら雪でボロ家がつぶれかねない。

一体いつ頃から、こんなに電気にたよりっ放しの暮しになってしまったのだろう。

偶然の事だが今から丁度百年前の一九〇〇年(明治三十三年)のこと。当時札幌は“市”ではなく“区”と呼ばれていた。この年の区議会で「札幌電気場設立建議」というのが可決されている。豊平川の水利権を得て、水力発電を行なおうというものだ。この計画自体は日露戦争ぼっ発によって陽の目をみなかつたのだが、さまざまな曲折を経たのちに、昭和十二年になって、上水道の実現と一緒に、市内初の水力発電所として実現した。いまの藻岩発電所がそれである。

もっともそれまで札幌に電気がなかったわけではない。明治二十二年に北海道製麻会社が蒸気機関を動力源とする灯用の発電をしたのが本道の電灯のはじまりとされ、明治二十四年には、札幌電灯舎が、いまの旧拓銀本店のある場所に一般営業用の発電所を作って売り出した。最初の頃の需要戸数三十戸、灯数八十三灯だった。値段は、毎夜日暮れから夜半十二時まで点灯する“半夜灯”が八燭光で月額九十銭。米一斗分を上廻ったから、とうてい庶民の使えるものではなかった。

電気が一般に普及しはじめたのは水力発電が行なわれるようになってからで、明治末頃といわれる。

大正に入ると、七年の北海道博覧会を機会に、馬車鉄道から電車に変わり、これが博覧会の目玉の一つとなった。

昭和に入ったあとは、街なかの一般家庭に電灯があるのは普通になったが、それでも近郊の農家ではランプ生活が長く続いた。

が、電気が普及したといっても、家庭では一部屋に一灯ずつの裸電球が点っているだけ、そのほかに電気を使うのはラジオくらいのものであったろう。

メーターで電気代を払うのは、よほどの上流家庭で、我々庶民の家は定額灯だった。明け方になると電気会社のほうでスイッチを切り、日暮れになると点灯する。

夕方、手許が暗くなった中で、つくり物などをしていた母親が「ああ、点いた」などと云いながら電灯を見上げたりしたものだった。

門灯のある家も少なかったし、街灯も少なかった。ネオンサインもなかった。だから、昭和十年代の半ば丸井デパート屋上の航空灯がゆっくりと回転するその明かりをたよりに夜道を歩いたりもした。

戦争中は灯火管制というのがあった。窓からまれる明りが空襲の目印にならぬよう暗幕を張ったり、電気の傘から黒い幕をたらしたり、電球そのものの一部だけ残して墨を塗ったりもした。

戦争が終わると、今度は発電能力がなくなり電圧が下がってローソク送電といわれるほどわずかしかが光らなかった。ただフィラメントが赤くなるだけの線香送電なんてのもあった。

それに比べて“何とまあ今は”というくらいのもの。ミレニアム・ショックで仮に電気が万一途絶えたとしても、終戦の頃に戻ったのだと考えれば良いのかもしれない。